萌の風

SHAPLA NEER

vol.300
2023.June

おかげさまで300号！

特集 洪水に強い
地域づくりをめざして

～ネパール、チトワン郡マディ市の
12年間の防災事業を振り返る～

特 集

洪水に強い地域づくりをめざして

～ネパール、チトワン郡マディ市の12年間の防災事業を振り返る～

報告／事業推進グループチーフ　宮原 麻季

シャプラニールは2011年からチトワン郡マディ市（注）で防災の取り組みを開始し、2つの事業を経て2023年2月に第三期となる最後の事業を終了しました。洪水常襲地域であるマディ市は、防災の取り組みがなされていない状態でした。そこから12年。各事業実施を通じて得た学びや取り巻く環境の変化にあわせて、災害への強靭性を備えるために地域に根付く活動を行ってきました。本特集では3つの事業を振り返り、シャプラニールの新事業を紹介します。

（注）2015 年に市になり、それ以前は 4 つの村を併せてマディと呼んでいた。

第一期	住民主体の洪水リスク削減プロジェクト
2011 年 6 月～ 2015 年 12 月	裨益者数：約 9,200 名　対象地域：マディ市内の 15 つの集落
第二期	洪水に強い地域づくり／土砂崩れに負けない地域プロジェクト
2016 年 1 月～ 2019 年 1 月	裨益者数：約 4,000 名 対象河川：バンダルムレ川
第三期	洪水リスクを軽減する広域流域管理プロジェクト
2019 年 2 月～ 2023 年 2 月	裨益者数：約 3,760 名　対象河川：ラクタニ川

（上左）河道の拡幅後、インフラ設置の一環としてじゃかごづくりの作業に参加する住民たち　（上右）洪水によって根元からなぎ倒された木
（下左）防砂ダムは水とともに流れる土砂等をせき止める役割を担う　（下中央）災害管理委員会の定例会議の様子
（下右）非常持ち出し袋の中身を見せてくれる住民（左）とその話を聞く職員

Contents

特　集

洪水に強い地域づくりをめざして
～ネパール、チトワン郡マディ市の12年間の防災事業を振り返る～

4 第一部 一つの川、一つのコミュニティ「One River One Community」が生まれるまで
6 第二部 一つの川、一つのコミュニティ「One River One Community」の定着をめざして
7 ネパールより　担当スタッフからのメッセージ
8 コラム 「仙台防災枠組」から読み解く
9 第三部 モラン郡での新規洪水防災事業
10 結びにかえて

11 クラフトリンク
ひと針ずつ刺し子に希望を込めたリユースサリーグッズ

12 これまでも、これからも、シャプラニールと共に
シャプラニール劇団メンバー　大出 珠江

14 この人に聞きたい
夜だけ開くパン屋さんがつなぐ、食と人
料理研究家・認定NPO法人ビッグイシュー基金共同代表
枝元 なほみさん

16 理事・評議員からのメッセージ
地域の子どもに寄り添う市民を醸成する

19 支援者限定ウェブページ「ツナガリシャプラ」を公開しました！

20 プロジェクトニュース
水害から命を守る、生活インフラの改善

22 スタッフの想い
シャプラニールのなんでも屋
総務・会計チーフ　杉山 和明

24 シャプラバ
人とのつながり、子どもの未来を信じて
グリーンコープ生活協同組合さが　理事長　小川 幸恵さん

25 シャプラバ文化部
バングラデシュでメヘンディ体験

26 冬期募金・ツナガリファンディングの御礼

27 お知らせ

無邪気な笑顔を見せてくれた少女。ネパールにて。
（撮影：渋谷敦志）

SHAPLA NEER

「取り残さない、その小さな声を。」

戦争や大規模な自然災害など、
多くの人々を苦しめる事件の裏で
日々の暮らしそのものに
困難を抱えている人がいます。

そういった声なき声をすくい上げ、
一緒に感じ、考え、行動し
少しでも明日に希望が持てるよう、
ともに歩んでいくこと。

それがシャプラニールの考える
「誰も取り残さない」という精神です。

南の風　通巻300号（季刊）
2023年6月1日発行

発行元　認定NPO法人
シャプラニール＝市民による海外協力の会
発行人　坂口和隆
編集長　小松豊明
編　集　髙階悠輔　長瀬桃子　宮原麻季
デザイン　柴田篤元
印　刷　株式会社上毛印刷

東京事務所
（火曜から土曜10:00～18:00／日曜、月曜、祝日定休）
〒169-8611
東京都新宿区西早稲田2-3-1 早稲田奉仕園内
TEL 03-3202-7863　FAX 03-3202-4593
Email info@shaplaneer.org
Web https://www.shaplaneer.org/

住民主体の防災活動に着手した第一期

2011年からは住民が主体的に防災活動に取り組むことをめざした事業を開始しました。事業開始時、一部の住民は古くからこの地域に伝わる洪水と共に生きる知恵で防災対策をとっていましたが、地域全体に共有されるような機会はありませんでした。また行政に対し復旧や防災対策に関する要望や交渉をするといったこともなかったため、被災しても復興までに長く時間を要する状況でした。そのため、本事業では主にソフト面（注）に注力し、住民間の防災情報共有会の実施や住民と行政をつなぐ活動を行いました。本事業では大規模なインフラの設置は行政が責任を持って行うことと考え、シャプラニールは小規模なインフラ設置に留め、行政の防災計画策定などに協力することに注力しました。

（注）「ソフト」は能力強化や情報など無形の要素、「ハード」は設備など有形の要素を示す

地域住民の話を聞き取る現地パートナー団体のスタッフ（右端）

家畜のエサをかさ上げして保管する方法

成果
- 住民が主体的に防災活動にかかわり、行政との連携がとれるようになった
- 異なる民族の間でも防災の知恵や情報の共有がされるようになった

課題
- 複数の河川の氾濫箇所に小規模インフラを設置しても、その影響で別の箇所で氾濫を起こすことが分かった

総合的な働きかけ、川一本を考える取り組みへの深化

第二期では前期事業からの学びを生かし、一本の川に集中して洪水発生のメカニズムを把握した上で、上流から下流までを包括的に対策を行うこととしました。この事業では自分の集落のことだけを考えるのではなく、一つの川を一つの地域と捉え、川全体の災害リスクを減らすための行動をとることをめざしました。この考え方を“One River One Community”と名付けたのもこの頃です。

具体的な活動は、河道の拡幅や堤防などを補強する護岸工事など比較的規模の大きいインフラの設置と、集落単位の災害管理委員会という住民グループの組織化を行い、地域の人々の防災能力の強化に向けた働きかけの両方を行いました。

川が蛇行し流れが速くなる箇所に石をつめた「じゃかご」を設置。住民が維持管理を行う

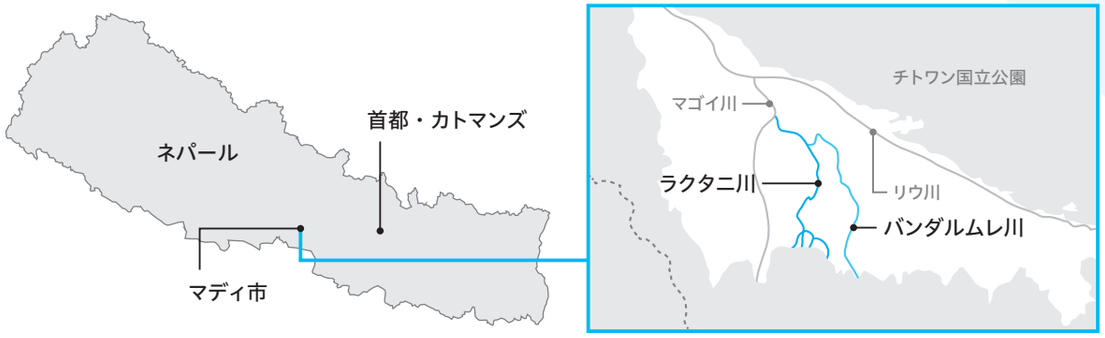
成果
- インフラの設置により、洪水発生リスクを軽減することができた
- 住民が各世帯および地域全体の両方で防災行動を取れるようになった
- 洪水被害の減った土地で、住民が自主的に養豚などの生計向上の活動を始めた

課題
- 行政および災害管理委員会が「One River One Community（一つの川、一つのコミュニティ）」のコンセプトの理解をより一層深める必要があった

2023年もあっという間に過ぎていくので、今頃慌てて目標設定。今年はベンガル語にチャレンジしたい！（小川晶子／市民アクション推進）

第一部 一つの川、一つのコミュニティ「One River One Community」が生まれるまで

シャプラニールが 12 年間かかわったマディ市において、防災への取り組みがどのように変化をとげていったのかを振り返ります。



事業のはじまり

2010年8月にチトワン郡での大きな洪水発生を受けて、当時チトワン郡内の別の地域で事業を実施していたシャプラニールは、この被害の大きさから洪水常襲地域であるマディ市で事業の実施を決定しました。マディ市は国立公園とインド国境に挟まれた孤立した地域であるため、事業開始当初は電気はなく、橋も洪水で流されてから復旧されていませんでした。

他方、シャプラニールは2007年～2010年までチトワン郡の丘陵地域で防災と生計向上活動を組み合わせた事業を実施していました。この事業の終了時には、住民が生計向上の活動に熱心に取り組んでいましたが、防災活動への取り組みについては十分でなかったという評価が行われました。そのため、マディ市での第一期事業は防災に集中した事業を行うこととしました。

事業開始前のマディ中心部。電気が通っていないためソーラーパネルを使用していた

マディの入り口となる川。当時は橋がなかったため裸足で渡るか牛の荷車を利用していた

断食をしていない私もイフタール（日没後初の食事）に呼ばれて一緒に食べる日々、太る理由しかない（汗）（内山智子／バングラデシュ事務所長）

第二部 一つの川、一つのコミュニティ「One River One Community」の定着をめざして

報告／事業推進グループ　横田 好美

第三期事業では、市、区、集落の防災連携が強化され、マディ市の洪水被害が軽減されることを目標に、「One River One Community」を合言葉にしました。特に第二期の事業で、One River One Communityのコンセプトが住民を中心とする災害管理委員会のメンバーには浸透したものの、行政には十分に浸透しなかったことを反省点として、本事業では住民と地方行政の連携を強化することをめざしました。

以前は洪水の被害にあっていた川沿いの水田で米づくりができるようになった

「高齢でも集落の人々の手を借りながら避難できるようになった」と話す夫妻（右端、中央）

成果

- **増水時や洪水発生時には自作した緊急連絡網を使用し避難を知らせたり、被害があった際には速やかに緊急会議を開き役割分担を行ったり、市、区、集落全体で対応できるようになった。**
- **マディ市の防災担当職員の給与の一部を事業予算から支出したことで、担当職員の防災意識や防災事業遂行能力が向上。各集落の災害管理委員会でインフラの維持管理のための基金をつくり、集落レベルでは対応が難しいインフラの損傷があった場合には、区や市の災害管理委員会に修復を要請することもできるようになった。**

まとめ

○3事業を通じてマディ市の住民、行政の防災能力は各段に向上した。災害・防災に関する市の予算の増額や、防災担当官の配置などもその表れと言える。さらに、住民は災害管理委員会を通じて、防災対策への理解を深めて行動するようになった。

○「一本の川の包括的な洪水メカニズムを明らかにしてインフラ対策を講じつつ、平行して住民、関係者の防災能力を強化していく」という目標に対して、災害管理委員会と各集落の住民は連携して取り組み組むことができた。しかしその一方で、行政は元々インフラ整備により強い関心があることから、「One River One Community」のコンセプトの理解は住民や災害管理委員会ほど深くまでは進まなかったと言える。

ネパールより

担当スタッフからのメッセージ

12 年間の事業には多くのスタッフのかかわりがありました。現地のスタッフがどのような思いでこの事業に携わってきて、事業が終わった今、事業をどう振り返っているのかを紹介します。

洪水被害の多い地域に笑顔をもたらした

カトマンズ事務所
シニアプログラムオフィサー
キル・ガレ

私は第一期事業の最終年から本事業にかかわりました。3つの事業の終了までは長い道のりでしたが、一番の成果は住民の笑顔が見られるようになったことではないでしょうか。

過去に洪水被害にあったことのあるモハンマドさんは「雨期はいつ洪水が起きてもおかしくないので、すぐに逃げられるように大事な書類を鞄に入れ抱えて眠っていました。家族、特に子どもたちのことも心配でよく眠れませんでした。でも今はこの土地で安心して過ごすことができるようになりました。」と笑顔で語ってくれました。

この笑顔にたどり着くまで平坦な道のりではありませんでした。例えば、河道の拡幅のためには土地を提供してもらう必要がありますが、簡単にはいきません。何度も何度も足を運び説明を繰り返し、真剣に向き合うことで協力してもらうことができました。住民、行政、パートナー団体といろいろな人の協力を得てこの事業は進められました。

そして、振り返ってみるとこの3つの事業はいずれも成功で、防災能力の向上に大きく寄与したと自信を持って言えます。人々の眠れぬ夜を幸せな日々に変えたのですから。

住民と防災ポスターについて話す様子

事業を通して変わった住民と自分自身

パートナー団体・RRN
プロジェクトスタッフ
サリグラム・ギミレ

私は3つの事業すべてにおいて、主に地域の住民や関係者に向けて防災の能力強化や参加の促しといったソーシャルモビライザーとしての役割を担いました。

私が初めてマディに来たのは2011年で、その頃、住民は洪水常襲地域ではあっても防災についての知識がほとんどない状態でした。防災について知らない人に教えるのは大変です。特に心がけたのは、事業や防災についての重要さを丁寧に伝えることでした。しかし、住民といってもいろいろな人がいますので、参加型での話し合いを通じて、自分事化ができるように意識して住民との関係を築いていきました。

災害管理計画について住民からの意見を話し合う様子（中央）

住民に主体的に事業にかかわってもらうことは簡単なことではなく、文句を言われることもありました。それでも頑張ることができたのは、シャプラニールの歴代の駐在員が、私が住民とどんな話をしているのか細かに気にかけてくれたからでした。私はソーシャルモビライザーとしての専門性がなくこの仕事を始めましたが、これまでに10年以上、地域の人々を巻き込み、行動の変容を促すという地道な仕事を続けてきました。そのおかげで今後どんな事業でも住民参加を促すような役割を果たせる、と自信を持つことができました。事業が終わってもマディの住民も政府関係者も自分たちで防災活動を続けていけるという自信を持っていることが頼もしく、そして私自身の誇りでもあります。

コラム

「仙台防災枠組」から読み解く

文／市民アクション推進グループチーフ（前ネパール事務所長）　勝井　裕美

今、必要だった防災支援

マディでの活動中の２０１５年、防災の国際方針となる「仙台防災枠組２０１５-２０３０（注）」が採択されました。またこれに加えて防災に関係する国際的な取り決めが２つなされました。９月には、気候変動と関連付けて災害被害削減の目標を含んだ持続的な開発目標（ＳＤＧｓ）が定められ、そして、12月のパリ協定（国連気候変動枠組条約第21回締約国会議、通称ＣＯＰ21）では、温暖化の悪影響に適応する計画や途上国支援が必要なことが確認されました。この取り決めには防災も含まれます。気候変動で気象災害の頻発、甚大化が危ぶまれる現代、私たちの洪水防災事業の意味は大きかったと言えます。

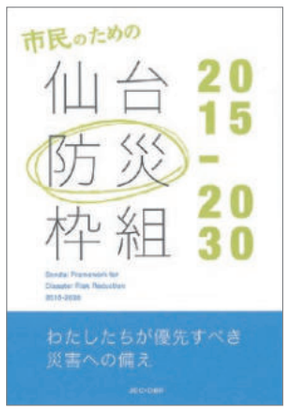
防災、持続可能な開発、気候変動は互いに関連しており、防災は人々の暮らしが安全で社会的、文化的、経済的に豊かになるための基礎となります。ここでは、防災と開発の関係に着目して、「仙台防災枠組」に照らし合わせてマディ市での活動を振り返ってみます。

防災と開発

仙台防災枠組の４つの優先行動には、防災への投資と、復興時のビルド・バック・ベター（よりよい復興）の２つが含まれています。発災前後に分けて書いてあり、復興は壊れていたものを立て直す段階として述べられています。しかし、途上国では発災前であっても開発の余地が大きく、ネパールでも橋、道路の建設といった開発が日々進んでいます。発災前の防災への投資（事前の備え）の時点でビルド・バック・ベターの考え方が必要なのです。

ソフトとハード

日本の河川のほとんどが整備されて河道が固定されている一方で、ネパールの多くの河川は自然の状態で河道が固定されずに農地や住宅まで浸水します。そのため、現地の資金、技術、人材で維持可能な技術を意識して土堤などのインフラを設置しました。しかし、それだけでは今の日本のように防災にお



（提供）防災・減災日本CSOネットワーク（JCC-DRR）

ける人のインフラ依存を起こし、人間の暮らしと川が、自然が遠くなってしまう。だからこそ、地域住民や行政がその地域の災害リスクを知り、備え、地域で対応する力を伸ばすソフト支援を行ったのです。これは、まさに仙台防災枠組の４つの優先行動のうちの、「災害リスクを理解し情報共有すること」と「災害リスク管理の強化」と重なります。ネパールでは元々、地域の人々の関係性は強いため、それを活かし、伸ばすソフトの活動と日頃の開発に防災の考えを入れ込むよう行政に提案し、インフラのあり方の見本を示すことが、今後より重要となると考えます。

（注）第３回国連防災世界会議で定められた２０３０年までの国際的な防災の取り組み指針。

暖かくなってきたので、次男（犬）をサマーカットにしました。不服そうにしております。（ジェームス稚奈／事業）

第三部　モラン郡での新規洪水防災事業

2023年より新たに開始する事業では、第三期事業で取り組んだ「One River One Community」のコンセプトを普及することをめざし、モラン郡で活動を実施します。

報告／ネパール事務所長　竹下　裕司

行政からも期待される事業モデルの普及をめざして

モラン郡では、過去5年間を見ても、洪水による人的被害がネパールの中でも大きく、2,000世帯以上が家を失い、数百人が死亡しています。（ネパール国家災害リスク軽減管理庁、2021）農業で生計を立てている住民が多く、洪水が生活に及ぼす被害は甚大です。河川に近い場所には、比較的貧困層が多く水害は彼ら彼女らの生計に大きな影響を及ぼします。また増水のため道路が遮断され、学校に通えない子どもたちもいます。現地の行政では洪水対策に取り組むための十分な予算や人的資源が足りず、具体的な対策はとられていません。

シャプラニールは、2021年、COVID-19危機対応支援プログラムとして食糧支援をモラン郡でも実施しました。モラン郡へのかかわりは、シャプラニールにとって地域の抱える課題に触れる機会となりました。

モラン郡の河川の実地調査にて。洪水時には流木もあり危険

生活の基盤を整え、持続可能な防災対策を

シャプラニールは、マディ市での事業の経験を基にして、ハード面とソフト面を合わせた対策を行い、災害リスク管理対策を持続可能にし、洪水リスクを低く抑え続けられるよう事業を展開していく予定です。具体的には、堤防などのインフラ設置を行うのとともに、定例会議や災害リスク軽減に関する研修、ワークショップなどによって、市、区、集落の災害管理委員会の能力強化と連携強化を図ります。学校においても防災の課題について学ぶ機会をつくり、地域や世帯への啓発や行動変容の波及効果を促していきます。また、防災を独立した課題としてではなく水の上手な活用によって、生計向上につなげるなど、地域の総合的な発展をめざしていきます。

住民に話を聞くスタッフ（右端）。新しい事業は住民との関係構築からはじまる

近所のネパール料理屋のオーナーさん、パートナー団体CWINの元スタッフの方でした。びっくり！（下鳥舞佳／コミュニケーション）

結びにかえて

報告／事業推進グループチーフ　宮原　麻季

2011年から開始したマディ市における防災事業は、住民主体のソフト面に焦点をあてた防災活動から開始し、その後「One River One Community」の考え方が芽生え、その定着にむけた動きへと深化の過程をたどりました。そして事業規模も第一期の事業予算が約2000万円だったのが第三期の事業では約1億2000万円へと増大しました。防災事業の深化のなかでシャプラニールの学びとして特筆すべきは「インフラ対策の位置づけ」と「災害管理委員会の活性化」だと考えます。

1　インフラ対策の位置づけ

3事業を俯瞰すると、インフラ対策は「行政がやるべきこと」から「包括的な流域管理の事業の一部分をなすもの」と変遷していきました。この考えの切り替えは第一期事業からの学びを反映させたものです。事業地には過去に他団体が提供した、維持管理されずに放置されたインフラが点在している状況をうけ、ソフトとハードの「バランス」を充分に意識して事業にあたりました。バランスをとって両輪で進めていくことは、言うのは簡単、やるのは難しいものです。事業のモニタリングでも、インフラ設置の状況は目に見えてわかりやすい一方、ソフト面での住民や行政の意識や行動の変化を認識できるまでになるには、日々の人々の様子をしっかりと把握しておく必要があります。さらには、住民が事業へ主体的に参加し防災への理解を深めるには継続的な地道な働きかけが必要です。インフラ対策を含めた事業実施には、事業初期の段階から一層丁寧に住民の巻き込みをはかっていくことが不可欠な要素であると言えます。

2　災害管理委員会を通じた行政との連携

3事業を通じて災害管理委員会の能力強化を事業の柱の一つに入れました。ネパールでは政府の災害管理計画に、市、区、集落単位の災害管理委員会の設置が定められているからです。これら3つの異なる単位の災害管理委員会のそれぞれの能力強化と機能的な連携がなされることで、防災はもとより、早期警戒や避難行動の呼びかけなどで、実際の洪水が発生したときも被害を軽減させることができるということを事業から学び取ることができました。さらには「One River One Community」のコンセプトを反映するかのような行動もありました。日頃はそれぞれの集落で活動する災害管理委員会同士が有事に連携する行動が取られたのです。このように、自分の集落のことだけではなく、横のつながりが活発になると面として広がり、災害への強靭性を備えた地域へと昇華していくと言えます。

12年間の事業を通して前述したさまざまな学びがありました。そして、マディ市で暮らす人々の防災対応力も各段に向上したと言えます。途上国における防災への取り組みについても仙台防災枠組やパリ協定での防災の取り決めが後押しになるでしょう。このような世界的な潮流、そして3事業からの学びを生かして、新しく始まるモラン郡での事業に取り組んでいきます。

1月に甥っ子が生まれました！かわい過ぎてすでに叔母バカ状態。甥っ子沼にハマっています。（菅野冴花／事業）

Craftlink クラフトリンク

#Who is SHE？

ひと針ずつ刺し子に希望を込めた リユースサリーグッズ

リユースサリーの鮮やかな色が溢れる

報告／小川晶子（市民アクション推進グループ・クラフトリンク担当）

バングラデシュのパートナー団体プロクリティの生産グループの一つであるSME（セイクレッド・マーク・エンタープライズ）。首都ダッカ市から北に120キロ離れたマイメンシンにある工房では、She with Shapla Neerの石けんやクラフトリンクの人気商品であるリユースサリーのアイテムを生産しています。ここでは、さまざまな理由によって性産業に従事せざるを得ないという過酷な状況にあった女性たちが、手工芸の仕事に新たな希望を持って働いています。

ラミナ（仮名）さんは、工房の近くで夫と2人の子どもと一緒に住んでいます。ここで働き始めて11年。働き始めた頃には布の端を縫うのが難しかったといいますが、今ではどんな仕事もこなせるといいます。

給料は出来高のほかに、能力給やボーナスなどが付与されます。「13歳と8歳になる子どもたちを学校に行かせることができて幸せです。2人が高等教育も受けられるように、この仕事を続けていきたい」と話してくれました。控えめな様子が印象的な彼女も、まだ20代。若くして母となり、子どもが小さい頃から働いてきた苦労は想像に難くありませんが、子どもの将来のために頑張っている様子に胸を打たれました。

インタビューの様子（中央は小川、手前左がラミナさん）

一本の長い糸を使い、等間隔に、直線に刺し子を施していく

＼＼ 新商品が届きました！ ／／

今号に同封のミニカタログ夏号では、ブランケットのほかにも彼女たちがひと針ずつ丁寧に刺し子を施したリユースサリーの新商品をご紹介しています。色柄の取り合わせがとても楽しく、バングラデシュの文化を感じながら日々の生活に取り入れやすいバッグや、便利なサイズで可愛らしい巾着が仲間入り。お買い物を通じてぜひ彼女たちにエールを届けてください。

商品は「クラフトリンク　オンラインショップ」からご購入いただけます。
URL：https://craftlink.shop/

今月のモットー：感謝（杉山和明／総務・会計）